

新谷 歩 著

今日から使える医療統計

村岡香織（慶應義塾大学医学部リハビリテーション医学教室）

本書は、週刊医学界新聞の連載が成書化されたものである。「Lesson」と銘打たれた章単位で読むことも、全体を通読して医療統計の全体像を把握することもできる構成となっているが、個人的には、初学者にとっては医療統計の最初の教科書として、すでに論文を読んだり書いたりされている方では知識の整理や新しい発見のために、一度通読することをお勧めする。

「序」に著者は、「統計とは、身近にある日常的に私たちが頭で考えていることを、データを使ってコンピューターに計算させているもの」と述べているが、文中にも、「回帰分析による補正」と似たことを行っている日常場面の例などが挙げられていて、「交絡」や「補正」といったそれだけ聞いてもピンとこない用語がすっと理解できる工夫がされている。日常生活での例や、過去の研究の実例が多く記載されていることで、初学者にとっては、「そもそも研究とは何か・研究によって何が明らかになるのか」といった根本的なことが理解でき、曖昧な臨床上の疑問や問題点を医療統計を使って解き明かしていく過程がイメージしやすくなっている。

そして、医療統計をすでに使ってきた方は、まずは目次を見ていただきたい。「Lesson」は1～13まであるが、データを記述するときに標準偏差・標準誤

差・信頼区間のどれを使うのが適切か（Lesson 1 統計の基礎知識）から、研究デザインごとの必要症例数の計算の仕方（Lesson 5 症例数とパワー計算）、多変量解析で説明変数をどう選び、何個までモデルにいられてよいのか（Lesson 8 多変量解析）、同等性・非劣性をどう示すか（Lesson 12 同等性・非劣性の解析）など、臨床医が研究計画を立てるときや統計解析を実際に行うとき、結果を解釈するときなどに頭を悩ます点、そして「査読で指摘されて困った」点などが含まれていて「かゆいところに手が届いている」と感じる人が多いのではないだろうか。そして、データの記述の仕方やグラフでの表し方など基礎の基礎から、「こちらのほうがよいのか」、「医学雑誌の査読のチェックポイントはここのか」といった新しい発見がちりばめられているのである。臨床医に必要な統計手法が過不足なく網羅され、傾向スコアのような新しい手法も紹介されているので、「このクリニカルクエスションであれば、このデザインで、このような形のデータを、症例数何人でとろう」といったデザインを考えるのにも有用であり、医療統計の本ではあるが、研究デザインの勉強にもなる、コンパクトながら心強い本である。

（A5判、頁176 2015年 定価2,800円＋税[ISBN978-4-260-01954-5] 医学書院刊）